

The 7th GLOBAL WORK CAMP 2019 in ASO

報告書

～ DREAM ～

Diversity & Respect & Encounter & Action & MIRAI



期間：令和元（2019）年

8月19日（月）～8月22日（木）3泊4日

会場：国立阿蘇青少年交流の家



目次

目的・概要	1P
スケジュール	1P
基調講演	2P
全体交流会	3P
阿蘇学	4P
ユメノトビラ	5P
第1分科会「環境」	6P
第2分科会「多文化共生」	7P
第3分科会「ジェンダー」	8P
第4分科会「教育」	9P
アンケート集計	10P
参加者より	11P
実行委員より	12P
実行委員長より	13P
4日間の軌跡	14P

目的・概要

目的

～人と人をつなぐ国際交流を通じたグローバル社会における若い世代の人材育成～

グローバル化、新興国(特にアジア)の成長等、世界全体の社会構造が大きく変化する中で、アジアを中心に未来を担う若い世代が集い、交流を図りながら、共生社会を構築するための自己の存在認識と可能性を発見する。

概要

【期間】令和元(2019)年8月19日(月)～22日(木)3泊4日

【会場】国立阿蘇青少年交流の家(熊本県阿蘇市一の宮町宮地6029-1)

【参加者】41人

日本人大学生 33人

留学生 8人(台湾、韓国、ベトナム)

【参加費】7,000円

主催

一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

The 7th GLOBAL WORK CAMP 2019 in ASO

大会スケジュール

8月19日(月) DAY1

8:30 日本文理大出発(大分)
9:30 熊本市国際交流会館出発(熊本)
11:30 国立阿蘇青少年交流の家 到着
12:00 昼食
13:00 開会式・開会宣言
13:20 基調講演
15:00～ 分科会導入
17:00 タベの集い
17:30 夕食
19:00 全体交流会
21:00 入浴
22:30 就寝

8月20日(火) DAY2

6:30 起床
7:15 朝の集い
7:30 朝食
9:00 分科会活動
12:00 昼食
13:00 分科会活動
17:00 タベの集い
17:30 夕食
19:00 阿蘇学
21:00 入浴
22:30 就寝

8月21日(水) DAY3

6:30 起床
7:15 朝の集い
7:30 朝食
9:00 分科会活動
12:00 昼食
13:00 分科会活動
17:00 タベの集い
17:30 夕食
19:00 ユメノトビラ
21:00 入浴
22:30 就寝

8月22日(木) DAY4

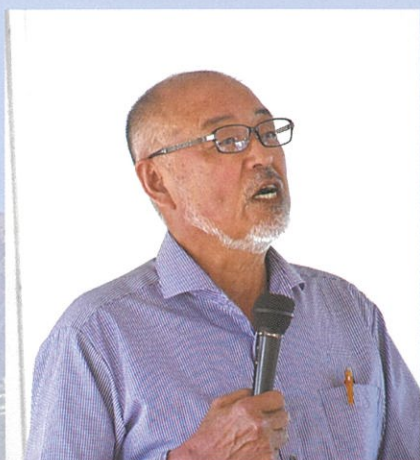
6:30 起床
7:15 朝の集い
7:30 朝食
9:00 全体報告会
11:10 講評・閉会式
12:00 阿蘇青少年交流の家出発
12:30 草千里ヶ浜
14:00 阿蘇神社・門前町
15:30 大観峰
16:00 大観峰出発
17:30 熊本到着・解散
18:00 大分到着・解散

基調講演 ～羽賀友信氏（長岡市国際交流センター「地球広場」センター長）～

熊本県立大学／3年 松尾美結

今回の基調講演は、長岡市国際交流センター「地球広場」センター長の羽賀友信さんに講師としてお越しいただきました。羽賀さんは、2015年9月1日国連で開かれたサミットの中で世界のリーダーによって決められた国際社会共通の目標であるSDGs（持続可能な開発目標）をキーワードに、今年度のグローバルワークキャンプの各分科会テーマに触れながらお話ししてくださいました。私が羽賀さんのお話の中で最も心に残っているのは、「世界を変えるためにはまず日本を変えること、日本を変えるには自分の家庭、家庭を変えるにはまず自分を変えることが大切」という言葉です。この言葉を用いて、羽賀さんは私たちにどのような大きな問題に対しても1人1人が「当事者意識」を持つことが大事だと伝えてくださいました。例年、グローバルワークキャンプの分科会活動で取り扱うテーマは壮大で、そのうちのほとんどが「絶対解」のないものばかりです。しかし、羽賀さんがおっしゃったように、この現代の多様性の世界で求められる「納得解」を話し合い、そして私たちにできることをアクションする、これがグローバルワークキャンプで私たちに求められていることなのだと再確認しました。

講演後の質疑応答の際には、羽賀さんが主任調整員としてカンボジア国境地帯で病院の運営をされた1980年難民救援医療プロジェクト（現国際緊急救助隊）についてお伺いしたり、教師になる夢を持つ質問者へアドバイスを下さったりと、どの質問にも大変親切にお答えして下さいました。羽賀さんの今回のご講演は1時間という短い時間ではありましたが、その1時間で参加者のこのグローバルワークキャンプへの士気を鼓舞してくださいました。お忙しい中お越しいただき、貴重なお話をお聞かせくださった羽賀友信さんに感謝します。



全体交流会

熊本大学 法学部法学科/2年 藤田夏妃

1 日目の夜の活動では、全体交流会を行いました。まず、特定の人になりきって指示通りに動く、「なりきりゲーム」「サイモンセッズゲーム」を行いました。担当者内で打ち合わせができていなかったために、ルールが参加者に伝わりづらかったこと、盛り上がりには欠けたことから、準備不足だったと感じました。しかし、頑張っ てルールを理解し、ついてきてくれた参加者が多く、参加者に助けられた部分が大いにありました。次に指定された順に、声を発さずジェスチャーのみで意思疎通を図り一列に並ぶ「ラインゲーム」を行いました。このゲームはジェスチャーを用いて行うことから、外国人留学生も楽しく参加していたように思います。また、同じ値のメンバーがいるときは誕生日が早い順に並ぶなど、条件を付け加えたので難易度は上がりましたが、ほとんどすべてのラウンドで、どの分科会も正しく並ぶことができました。3 目目に「じゃんけん列車」をおこないました。予定では、外国人学生の参加者がもっと多いと考えていたので簡単なゲームにしようと「じゃんけん列車」を選びましたが、日本人学生、日本語が上手な外国人学生が多かったことから、もっと難易度の高いゲームをすべきだったと反省しています。しかし、その中でもかなり盛り上がっていた様子だったので、安心しました。4 目目に「じゃんけん列車」で集まったメンバーで「人間知恵の輪」をおこないました。スキンシップをすることによって互いの距離感がより近づいたようで、どのチームも楽しそうに笑ったり、真剣に相談しあったりしながら知恵の輪を解いていました。1 回戦目は 7 人程度でおこないましたが、2 回戦目は 10 人強と人数を増やして知恵の輪を作ったことで難易度も上がり苦戦しているようでしたが、最後にはどのチームも解くことができ、自然と拍手が起こるような場面もありました。ここで、自分が予定していたよりも早くスケジュールが進んでしまい、進行に悩んだところ、大分の EC がゲームの提案をしてくれ、本当に助かりました。「せんろはつづくよどこまでも」では、隣り合った人の膝をリズムに合わせてたたくというゲームで、参加者同士が文字通り密になる事ができたと思います。最後に用意していた、英単語をあてる「ハングマンゲーム」では、最初こそ EC にこちらで準備した英単語を出題してもらったものの、早く解答し終わった分科会では、参加者が自主的に問題を作成し出題している様子も見受けられ、非常に楽しんでいる様子でした。

私が全体交流会でのレクレーションを決める際に特に意識した点は「言葉を使わず意思疎通を図ること」でした。今回は日本人学生の参加者が多かったことから、言語間での問題はほとんどありませんでしたが、スキンシップでの交流により参加者全体の仲が深まったように感じました。ただし、予想よりもはやくスケジュールが進んでしまったこと、担当者の中で理解に差があったことなど準備不足の点も多かったので、来年以降改善していきたいと思いました。



熊本大学／3年 那須啓一郎

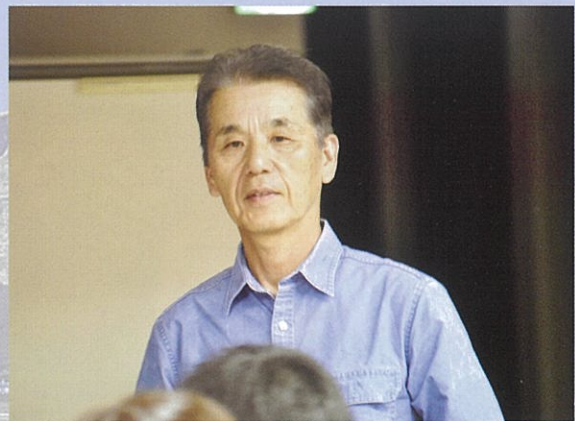
今回の阿蘇学では、阿蘇の自然と阿蘇に住む人々とのかかわりをテーマに、WakuWakuOFFICE あそ Be 隊 隊長の薄井良文氏に講演いただきました。

講演の前に、参加者同士の仲を深めるためのゲームを行い、まだ話したことのない参加者と関わることで、リラックスした雰囲気になっていきました。そのあとはトランプを使ってペアを作り、2人で話したり、相談したりしながら講演を聴くという形で進められました。講演中は地震に関するクイズなどでにぎやかな雰囲気が続いていました。EC の立場としては、講演以前に、参加者の興味を惹く技に感銘を受けました。この4日間には、レクチャーという形で参加者と情報や知識を共有する場面が多くあり、どのようにすれば伝えたいことがきちんと伝わるのか、それ以前に興味を持って聞いてくれるのか、など難しさを感じていました。薄井氏の講演を聴き、アイスブレイクの重要さや、参加者のニーズにより添った工夫、例えば、一方的に話し続けるのではなく、参加者がそれぞれの経験とリンクさせながら話を聞くことができるような問いかけをするというようなレクチャーの仕方が必要であると感じました。

薄井氏は現在の活動を始める以前、消防士として活動されており、消防士としての経験を踏まえながら3年前に発生した熊本地震についてお話しされました。災害大国である日本に生きる我々は、身近な自然とどのようにかかわっていくといいのか、これからの私たちの生活を考えさせられるような内容でした。例えば阿蘇山など、私たちに感動や癒しを与えてくれる自然ですが、時には牙をむく時もあります。そんな自然と上手に付き合っていくためには、住む場所を工夫したり、常に危険がそばにあることを自覚したりしていないといけません。そのような人間の意識があっこそ、美しい自然と共生することができるのではないかと感じました。

講演の最後に、数名に感想を聞かれましたが、「面白かった」という感想が出ていました。私たちの生活にとって重要なお話も多かった講演でしたが、薄井氏のユーモアを含んだ語りによって、参加者にとっても興味深く面白い講演であったようです。

この「阿蘇学」は、せっかく4日間、普段訪れない阿蘇で過ごすのだから少し阿蘇のことを知ってみよう、という趣旨で行われています。どのような内容を依頼すれば参加者が興味を持ってくれるか？という点では非常に難しく、議論も難航しました。しかし、今回薄井氏に依頼し、このような楽しい時間にできたことを、大変感謝しております。



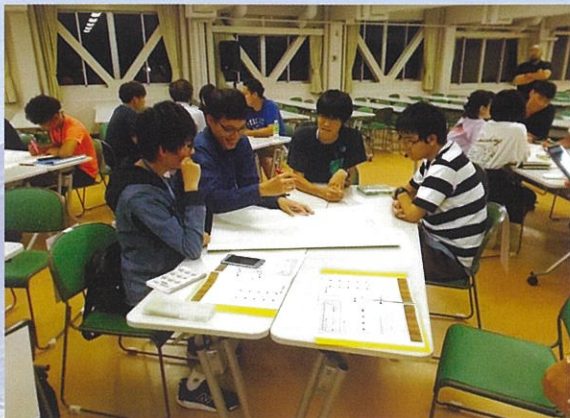
ユメノトビラ ～ワールドカフェ～

熊本大学 / 3年 菊川琴美

ユメノトビラは、将来の夢や理想について自分の言葉で語ることによって、より具体的ではっきりした目標に近づけること、そしてワールドカフェを通してたくさんの仲間の意見やアイデアを参考にしながら新しい視野を広げるチャンスを得ることを目的に行いました。

ワールドカフェ対話形式を利用して1テーブル4～5人で問いについて自由に話し合ってもらいました。最初の問い「2030年の理想の町はどんな町？そしてその町であなたは何をしたい？どんな存在でありたい？」に対して、各テーブルを一つの町と仮定した上で話し合ってもらいました。席替えの度に新しく入れ替わるメンバーは、最初の問いで考えてもらった理想の町に引っ越してきたという設定のもと「新しく引っ越してきたその町で、あなたは何をしたい？どんな存在でありたい？」という問いについて話し合ってもらいました。実行委員には各テーブルのホストとして務めてもらい、テーブル内での話し合いの活性化と話しやすい環境づくりをサポートしてもらいました。参加者からは「ECが話を振ってくれたので話しやすかった」「自由な楽しい雰囲気、意見を言いやすい環境だった」という声が聞かれました。話題が尽きることなく、各テーブルに設置された模造紙が個性豊かな理想とアイデアで埋まっていく様子はとても印象的でした。

全体を通した感想の中には、「多くの人と夢について語り合い、交流できた」「自分との関連性を広めることができた」「誰でも話せるテーマだったので楽しく話せた」という意見や、一方で「どんな存在でありたいか、という問いが難しかった」「もっと交流したかった」などの意見もありました。メンバーシャッフル方法を限定したことで交流の幅を狭めてしまったこと、進め方と問いの意図が参加者に十分に伝わっていなかった点は反省点として今後に活かしたいです。遠いようで近い2030年、私たちが暮らす社会はどう変化しているのか。理想の社会を実現させるために自分に何かできることはないか。将来の夢や理想を踏まえて話し合うことで互いに刺激を与え合いながら自分と向き合える機会を得られたこと、そして、分科会を超えてたくさんの仲間と交流できたという点において意味のある企画だったと実感しています。2030年、その先もグロキャンを通して出会った仲間同士のつながりが続くことを願っています。どのような生き方をしたいのか、正解はないからこそひとりひとりが一個人として輝ける未来であってほしいと願っています。



第1分科会 「環境 Say No to Plastic!」

熊本大学/3年 菊川琴美

環境分科会では、プラスチック問題についての理解・関心を深めること、プラスチック利用方法を見直して私たちが取り組める新しいライフスタイルの提案と実践、啓発を行うことを目的に議論を行いました。韓国からの留学生2名と日本人学生4名、EC2名を含めた合計8名の小規模の分科会であったため、初日にはすでに全員が打ち解けた様子で良いスタートを切ることができました。2日目は熊本市国際交流振興事業団の木下俊和さんによる「海洋資源の保全と持続可能な活用」についての講演を聞き、それに対して参加者で討論を行い、更にはグループワークを通してプラスチックに関する理解を深めました。3日目は、プラスチック問題を巡る国際動向とプラスチック使用量の削減に取り組んでいる企業や個人の活動に注目し、これから私たちがどう変わるべきかについて議論しました。「もとの豊かで美しい海を返してほしい。」—「それは難しい。海に流れ込んだプラスチックごみをすべて回収するなんてことは…」—「ならば、せめてこれ以上、海にプラスチックを流さないで。」これは私たちが実際に行った「なりきり討論」において、日々当たり前のようにプラスチックを消費する私たちと、海の生き物たちとの間で交わされたやり取りの一部です。プラスチックを巡る問題、これは私たち消費者の立場からの視点だけでは議論できません。基調講演の羽賀友信さんの印象に残った言葉の一つ、「多くの問題を抱える今のグローバル社会において問題解決に必要なのは、一つの解を求めることではない。みんなが納得する答えを探ること。」という言葉をもとに、なりきり討論から議論へと繋がりました。プラスチックをこれ以上海に流さないためにはどう変わるべきか、プラスチックの利用方法・捨て方・リサイクル・教育の4つの面でのアクションプランを模索しました。マイボトル給水機の普及、販売店等での容器回収率を上げるために分かりやすく、かつインセンティブなポイント還元制度の提案を行うこと、使い捨てプラスチック削減のためのマイバックと食卓用スプーン・フォーク等、マイタンブラー等の普及を促すためにSNS上で呼びかける、各大学の売店に要望書を提出すること等が挙げられました。教育においては学校教育での体験型学習の推奨、年代別に応じた啓発ビデオの作成などSNSやメディアを通じて一人ひとりの危機意識を高めることなどが挙げられました。

分科会活動では常に自主性と柔軟性、協調性、判断力が問われました。分科会の準備、進行、議論のまとめ方などに対して不甲斐なさを感じることも多くありましたが、その分、今の自分を見つめ直してこれからの将来に繋がられる大きなチャンスになったと思っています。特に良かった点は、分科会メンバー全員が活発に議論の場に溶け込める雰囲気を作ることができたことです。これは分科会メンバーの協力のもと、分科会メンバーとECと一緒に作り上げたからこそ成し遂げられたのだと実感しています。日常の中に溢れているからこそ、小さなところから変えていける！私たちから未来を変えよう！ #플라스틱 아니오라고 말!



第2分科会「多文化共生」

熊本県立大学／3年 尋木春奈

この分科会では、日本に住む外国人と日本人が国籍に関係なく、人としてお互いに理解しあい、安心して暮らしていけるようにするには私たち大学生にできることは何かを考えていきました。

初日は、これからの分科会活動で意見を言いやすい環境作りのため、アイスブレイクを中心に行いました。自己紹介やお題トークをしながらECも含め、参加者全員の緊張がほぐれるよう進行しました。今回は分科会の人数が10人と例年と比べ、少ない人数だったのですぐに顔と名前を覚えることができました。お題トークでは、「これだけは人に負けられないこと」や「自分の出身地をPRしよう」というお題で自由に話してもらいました。

2日目は、まず「多文化共生」という言葉を聞いて、何を思い浮かべるか自由に書いてもらいました。「相互理解」、「偏見を持たない」、「差別をしない」、「外国人を特別扱いしない」、「助け合い共に生きる」という言葉が多数挙げられました。その後は外国人の増加の一番の要因である技能実習制度について取り上げました。今の日本の現状である人口減少と少子高齢化が及ぼすこと、それに伴い、どんどん外国人労働者が増えることについてレクチャーをしました。外国人技能実習生の実態取材したビデオを見て、問題点や改善策を出し合いました。問題点として、本来の外国人技能実習制度では日本の発達した技術や知識を習得し、母国に帰ってから役立ててもらおうのが目的ですが、そのビデオでは長時間労働や賃金未払いなど不当な扱いを受け、技能実習生を労働力としてしか見られていないという現実がありました。そこで、私たちは人権問題についても議論し、このような状況にある人々を救うには相談できる窓口や地域コミュニティの存在が必要だと考えました。

また、災害大国である日本は災害を避けることはできません。そこで、緊急時の多文化共生についても考えました。実際に2016年に起こった熊本地震での避難所での生活を取り上げ、外国人にとって避難所での生活はどんなものだったのか、そして私たちにできることを出し合いました。熊本市国際交流振興事業団事務局長の八木浩光さんと熊本大学の留学生のフランス・ワーグライさんから熊本地震の時の取り組みや、その時の実際の経験をお話していただきました。フランスさんは、初めて地震を経験され、その時の体験を広めたいという思いから、防災や熊本地震からの復興を目的に活動する留学生中心の団体、KEEP (Kumamoto Earthquake Experience Project) を結成しました。フランスさんの話から国籍を越えてお互いに支え合える身近なコミュニティづくりが大切であるということが分かりました。

3日目は、文化が違う人とお互いを理解するためには、その人の文化を知ることが大切だと考え、異文化教育に取り組んでいる小学校の事例を紹介しました。そして、地域に住む外国人と緊急時だけでなく普段から継続的で深いつながりを持つには何が必要かを参加者全員で話し合いました。実際に交流できるイベントはあるが、その情報が行き届いていないという意見が多数ありました。その情報を広げるにはSNSで発信すること、大学の掲示板や公共施設に掲示する、友達に呼びかけるなどが挙げられました。

今回の分科会を通して、国際交流できる活動に積極的に参加し、それを周りに広めていこうと思いました。



第3分科会 ジェンダー

熊本大学／1年 渡辺英美佳・谷口華奈子

今回の分科会活動を通して、実行委員側も一参加者として学ぶことが多くありました。まず、一日目にはこの分科会の導入や説明がありました。みんなで LGBTQ に当たる人々がどのような人であるかの知識を身につけました。初めは LGBTQ と聞くと参加者はマイナスなイメージを持ちがちでしたが、それに関する『正しい理解』をすることで、自分の個性を生かして幸せな人生を送っている LGBTQ の人々もいることを知りました。2 日目は最近話題になった LGBTQ に関する実際の出来事をもとにそれぞれの意見を出し合いました。2017 年 5 月に、東京都渋谷区の手元デイスカウントショップである『ドン・キホーテ』の店舗の 1 つに、新たに設置されたトイレが『LGBTQ(性的少数者)用トイレ』と一部で報道され、話題を呼びました。そのトイレの標識は『All Gender』であり、お店側は「お子様連れやお体の不自由なお客様の他、性的指向や性自認の如何に関わらずどなたでもご利用いただけるトイレ」としています。この出来事について、このトイレ設置に反対なのか賛成なのか分かれて議論したり、様々な人の立場に立ってこのトイレの印象などについて意見をシェアしました。話し合いの中では、『All Gender』のトイレに入る際に知人に見られると、今の日本社会では彼らが差別視されることが予測される。」そのトイレに入る人はいじめの対象に遭う可能性がある。などの意見が出ました。これに対し、「そのトイレに入る人は、差別されることは了承済みなのではないか』『LGBTQ= 差別される人』と言う概念がおかしく、それを払拭するためにこのトイレは新設されたのだ。」という意見が出るなど、白熱した議論が交わされました。

3 日目は、映画「カラコエの花」視聴後いくつかの質問について分科会全員で話し合いました。「カラコエの花」は日本の社会を縮尺したような作品です。高校生の主人公のクラスでは、ある朝唐突に LGBT についての授業が行われそれを機に LGBT の人を探すゲームが始まります。そんな主人公の親友はやむを得ない形でカミングアウトします。そして最後には親友は学校に来なくなってしまいます。私たちはこの物語を見たあと、もし自分があの教室にいたらどうするか、先生たちの対応は正しかったか等について自由討論をしました。1 日目の質問では、探そうとする人、止める人、状況によって判断する人・先生に任せる人等、3 つの立場に別れましたが自分から積極的に関わるのは難しいというのが大半の意見でした。次の質問では、教育的には正しいがやり方が間違っていた、という意見で全員が一致しました。これは現代の日本において LGBTQ に関する正しい知識をもった教育者が少ないことを知るきっかけにもなりました。また、3 日間の活動を踏まえ、今現在 LGBTQ をどう思うか、という質問では最初はぼんやりとしたイメージしかなかった人からも、それを 1 つの個性と認め、受け入れる、といった前向きな意見を聞くことができました。最後に私たちは「皆が生きやすい社会をつくるには」について話し合い、交流して誤ったイメージを持たれないようにすることや、皆が積極的に関心を持つことで社会の差別的な雰囲気を変えることが大切という結論に至りました。この 3 日間の活動は EC も含め、LGBTQ の置かれている立場、受けている差別のひどさ等様々なことを学べた貴重な経験になりました。



日本文理大学／1年 岩川志音

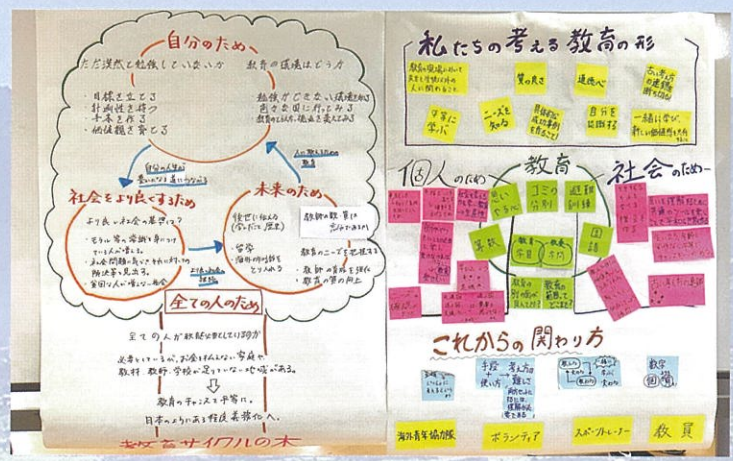
教育分科会は、先進国と発展途上国の教育の差、ユネスコという教育の向上を目指す国際機関の存在について学びました。メンバーは日本人学生9名（うち EC メンバー 5 名）、留学生3名、社会人5名（大分県ユネスコ協会1名、熊本ユネスコ協会4名）、日本文理大学から高見大介先生の、18名です。

最初に場の雰囲気を和ませることを目的に、教育分科会のメンバーで「自己紹介ゲーム」「人間知恵の輪」などのアイスブレイクをしました。次に、パワーポイントを使って発展途上国の教育の現場について説明しました。その説明に基づき、各班に分かれてワークを行いました。まずは教育がなんのためにあるのかというテーマでグループ討論を行いました。出てきた意見を項目毎に分け、付箋に書き出し、模造紙に貼り付けていくという作業です。出来上がった模造紙を班ごとに発表し、それを聞いた他の班が感想・意見・質問を述べてもらうといったグループワークを行いました。出てきた意見として、「自分のため」「社会のため（世界のため）」「未来のため（今現在でもある）」というものが挙げられ、その三つはリンクしているという考え方がありました。

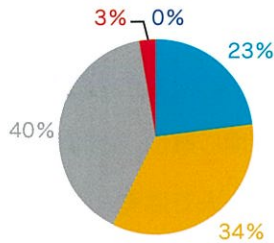
二日目には佐藤隆司さんが、ユネスコが世界的に行っている、世界遺産の認定や世界寺子屋運動の活動、識字率の向上を目指す取り組みのことについて語ってくれました。日本がすべての国民に教育を受ける権利というものを作ったからこそ、私たちは今教育を受けられているのです。世界にはそのような権利が持てない国がたくさんあり、今でも文字の読み書きができない大人達、または子供が約7億人もいるそうです。この世界で私たちはとても恵まれた国、環境に生まれたということを確認しました。

改めて、教育とは何かという答えは、
『教育』とは、ただ“学問”を学ぶことに縛られたことを意味しているわけではない。
人生を豊かにし、身に起きる可能性のあるリスクを軽減するために身につける知識もだれかに教えてもらって得たわけであるから“教育”につながる。
教育というのはすべての人のためにある。
 という風にまとまりました。

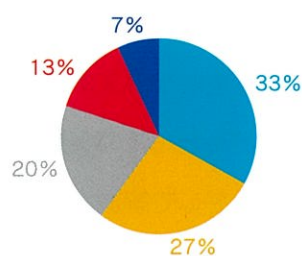
この四日間で教育のことについて深く考える機会を作ることが出来ました。勉強が全てではなく、自分のため、未来のため、社会のためと教育は繋がっています。今自分たちの置かれている社会とは反対の社会にいる人々が存在していることを意識することが大切です。



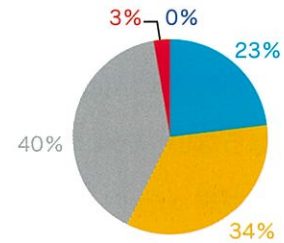
1：分科会に関して



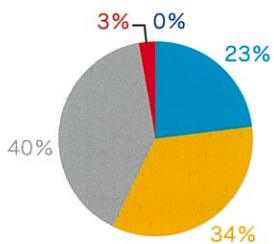
2：基調講演に関して



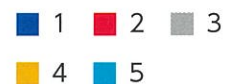
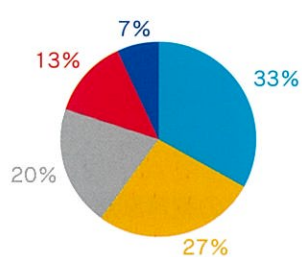
3：阿蘇学に関して



4：ユメノトビラに関して



5：キャンプに関して



※5段階評価のうち、1が不満、5が満足

参加者からアンケートを集計したところ、多くの意見が寄せられました。とても嬉しいお言葉から反省点まであり、ありがとうございました！今回の反省などは来年度のこのグローバルワークキャンプに是非活かしていきたいと思えます！来年度もグローバルワークキャンプをよろしくお願ひします★ここで、参加者からの感想を報告したいと思います。

●分科会に関して

<環境>

- ・ 少人数で自分の意見を沢山伝えることができた。
- ・ 沢山の議論、話、交流ができた。身近なプラスチック問題について深く考えることができた。

<多文化共生>

- ・ 考えるのはとても難しかったけれど、様々な考え方があることが分かり、違う視点の味方から考えることも面白くとても刺激を受けたから。

<ジェンダー>

- ・ 主題が難しい
- ・ 日本の意見だけでなく他国の意見も取り入れた良い話し合いだった。
- ・ 外国人がもっというてほしかった。
- ・ 本当のLGBTQの人の話とか聞ければ良かった。

<教育>

- ・ 話し合うお題的的が大きすぎて、考えにくかった。
- ・ 問題意識が高まった。

●基調講演に関して

- ・ 普段聞けないような世界での経験話がとても興味深かった。
- ・ 最初に4日間のキャンプの方向性を示してもらえたことで、毎日の活動に積極的に取り組めた。
- ・ 内容はちょっと難しい。SDGsのことについて知ることができたから。
- ・ SDGsの目標と自分のレベルで考えるべきことを知ることができた気がする。

●阿蘇学に関して

- ・ 実際に熊本地震に遭った身として、そのときの気持ちを忘れることなく常にいつ、何が起きてても大丈夫なように準備しておきたいと思った。
- ・ 災害大国に住んでいる中で心の構えなどをアップグレードすることができた。
- ・ 自分は完璧でなくていい、足りない部分は他人に頼ってもよいということに気づかされた。

●ユメノトビラに関して

- ・ みんなの考えがとてもユニークで、面白かった。自由な楽しい空間で話しやすかった。
- ・ みんな自由に意見を出し合う中でも、分科会で話し合った内容も取り入れられていて面白かった。

参加者より

■ 熊本県立大学／チェ・ウヨン (韓国留学生)

私にとってキャンプは楽しみであるとともに不安だった。生まれて初めて参加するキャンプでわくわくしたが、うまくしゃべれなくて仲良くなれるか不安だった。結果的には仲良くなれたので良かった。私の分科会は環境だった。環境の分科会では主にプラスチックについて話し合った。日常生活になくてはならないものになったプラスチックはどんどん海の生態系を崩していた。環境に悪いことは知っていたが思ったより深刻だった。色んな活動をして解決方法を考えることなど、一人では考えつかなかったアイデアがたくさんでた。その流れの中で自然の大切さなどたくさん学んだし、役に立つことや自ら実践できることが何かを振り返る時間だったと思う。

■ ルーテル学院大学／吉川はる

今回、私は教育について考えました。日本以外の教育制度を見ていく中で、日本の教育のありがたみや、不十分さを感じました。比較して初めて気づくことがあり、大変勉強になりました。さらには、発展途上国への教育支援を考える上では一方的な支援だけでは支援される側の成長は見込めないと感じたため、実験的に支援するのではなく、お互いの信頼関係を高めながら文化背景などを配慮し合い、一緒に教育の理想を形作って行く必要があると感じました。



熊本大学・短期交換留学生／レティラン(ベトナム)

3泊4日で行われた第七回グローバルワークキャンプは皆さまの努力のおかげで、無事に終わることができました。3泊4日でしたが、非常に有意義なキャンプでした。本当に思い出深い夏になりました。

グローバルワークキャンプは、日本人の大学生と留学生を合わせて、約50人になりました。集合の活動でほかの団体と交流することもできました。小学生の子供たちはとても可愛かったです。本当に楽しい時間を過ごすことができました。しかし単に楽しいだけではなく、様々なプログラムを通して、交流し、グループワークを行い、将来を担う若い者たちが地球規模の課題に取り組みました。このイベントの目的は、アジアの国々を中心とする大学生の方が集い交流することを通じたグローバル人材の育成です。

7回目となる、今回のテーマは「DREAM」でした。単純に「夢」という意味だけではなく、それは「DIVERSITY」・様々な人々と、「RESPECT」・互いに尊重しあい、「ENCOUNTER」・その出会いを大事に、「ACTION」・共に行動し、そして「MIRAI」・未来を目指すという頭文字をとっています。本キャンプは、「一期一会」出会いは一生に一度限りという精神を持って行いました。皆様はお互いに最高のもてなしをしました。本グローバルワークキャンプをきっかけに、他の人の価値観や考え方を理解し、自分の世界を広げることができました。また、多くの人との交流や講演によって、自分の夢をシェアしながら、将来への抱負を込めて、心を開いて、熱く話し合いました。グローバルワークキャンプはとってもいい経験になりました。普段は関わる機会のない人たちと触れ合ったことは、大変いい刺激になりました。

プログラムとしては、基調講演、全体交流会、阿蘇学、ユメノトビラ、そして分科会活動をしました。分科会のテーマは、「環境・SAY NO TO PLASTIC」、「多文化共生・INTERCULTURAL COEXISTENCE」、「ジェンダー・GENDER」、「教育・EDUCATION」の4つ。この4つのテーマについて議論し意見を出し合い、各分科会ではグループを分けて、ディベートを行いました。そのことから、新しい視点を広め、新しい課題を展開し、今回のキャンプの主役である参加者の皆さまに積極的に楽しく話し合ってもらいました。分科会の活動以外にも阿蘇のことを学んだり、自分の理想的な町を作ったり、夢をお互いにシェアしたりすることもしました。キャンプは皆さまの笑顔で終わりました。

この経験が、将来、国づくりまたは町づくりをしていくための大きな力になるはずですが、キャンプ全体を振り返ってみると、準備不足、開催の仕方に関して、その後、実行委員がそれぞれの反省点を振り返り、次のキャンプへ向けて改善していきます。最後になりますが、熊本市国際交流振興事業団の皆さま、そして手を貸してくださった方々、参加者の皆さま、実行委員一同から心より感謝を申し上げます。



今年のグローバルワークキャンプは4月末の会議から始まりました。そこにやってきたのは、私と昨年の実行委員長の2人でした。実行委員長は予定があり参加できないということで、昨年度のEC(実行委員)は私一人という状況でした。それでも少しずつ人数も増え、それぞれの興味のある内容で分科会を構成し、最終的に熊本・大分合わせて14名のECで当日を迎えました。大学の授業やサークルなど、全員がそろう機会は少なくそれぞれの事情を考慮しながら日程調整をし、行った会議でしたが、大分のメンバーとの打ち合わせは当日以降という場合も多くありました。そんな中でも、一人ひとりが責任を持って役割を果たし、様々な場面で協力しながら乗り越えることができました。

実行委員長としてなにができたかと言われれば、それほど多くのことはしていません。それぞれがそれぞれの場所で、確実に役割を果たしてくれたからこそ、私自身も参加者と関わる機会ができ、ECを含めて全員が「楽しかった」という気持ちで終わることのできたキャンプだったと感じています。このグローバルワークキャンプを本当に素晴らしい思い出にしてくれたのは、ECだけではありません。参加してくれた学生の皆さんが様々なところで話しかけてくれたり、ねぎらいの言葉をかけてくれたりしたこと、会場設営などの手伝いをお願いすると、快く応じてくれたことで、円滑にプログラムを進行することができました。そして、ECにとっても「楽しい」思い出になったと思います。分科会や各プログラムの詳細については、ECが事前に会議を行い決めたものですが、当日以降は参加者を含めて「全員」で作り上げたというのが正しいと思っています。

私が初めて参加したのは一昨年の第5回のキャンプでした。友達も誘わず一人で参加者として飛び込んだのですが、そこで出会ったECの皆さんや参加者の仲間たちのおかげで楽しい時間を過ごすことができました。そして「自分もECをやってみたい」という気持ちが沸き上がり、昨年はECとして準備段階から取り組みました。長いようで短い大学生活の中で、こうして一つのイベントを作り上げる経験ができたことは、これからの人生の糧になっていくのだろうと感じています。しかし、それは当然自分一人ではできません。そばに素敵な仲間たちがいたからこそ、できたことだと思っています。すべての人に、感謝しています。

自分は周りの人に生かされていて、それを互いに感謝しあうからこそ、豊かな人生を送ることができるのだと思います。この出会いとつながりを大切に、それぞれの場所でさらに輝いてほしい、そして明るい未来を描いてほしいです。



Memories in ASO



第7回 グローバルワークキャンプ実行委員メンバー

那須 啓一郎 (熊本大学)

菊川 琴美 (熊本大学)

尋木 春奈 (熊本県立大学)

松尾 美結 (熊本県立大学)

藤田 夏妃 (熊本大学)

渡辺 英美佳 (熊本大学)

谷口 華奈子 (熊本大学)

LE THI LAN (熊本大学)

萩原 匠海 (日本文理大)

木下 広天 (日本文理大)

山田 涼太 (日本文理大)

岩川 志音 (日本文理大)

加藤 瑞紀 (大分大学)

井田 ゆき (立命館アジア太平洋大学)

協力：熊本ユネスコ協会・熊本留学生交流推進会議・日本文理大学

主催：一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

